
くそったれ聖剣伝

小野 大介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

くそつたれ聖剣伝

【Nコード】

N0740BA

【作者名】

小野 大介

【あらすじ】

世界の果てに巨大な扉が聳え立つ世界。人間に家族を殺され、魔物に育てられた少年エクスは、あるとき、父親として敬愛する獅子王ガウエインの命により、魔王ペンドラゴンを脅かす聖剣を破壊するための旅に出たのだが……。

重ね合わされたガラスに砂粒が当たる。一つや二つではない、無数にだ。

小さくて丸い透明なガラスを通して見えるのは、砂ばかり。暴風に巻き上げられた砂が景色のすべてを遮ってしまっていた。

そこは砂色の世界。

砂嵐の中を、一人の人物が突き進んでいる。吹きつける砂はまるで石つぶてだ。それを避けるため、毛布のような大きい薄汚れた布を、全身を覆わんと頭からかぶっている。

砂から目を守るためのゴーグルが、毛布の隙間から垣間見えている。

二つの目が、ゴーグルのレンズを通して景色を見ていた。金色の瞳だ。

進むこともままならない砂嵐。引き返すこともままならず、右も左も分からない中を、その者は、這ってでも突き進んでいた。

あるとき、突如として風が止んだ。

舞い上がっていた砂が四散し、景色が一瞬にして開けた。しばらくぶりの太陽が見えた。真っ青なまでの空が広がった。そして、見渡す限りの砂の大地が現れた。

砂に埋もれていた人物はむくりと身体を起こし、立ち上がった。

一変して灼熱の大地と化した世界に目を向けた。

どこまでも砂漠が続いている。

そんな中に、砂とは違う色のものが見える。灰色のそれを、ゴーグルのレンズを通して金色の瞳は確認した。

「見つけた……あれが、そうか！」

毛布の下から男性の声がした。若い声だ。

男はかけているゴーグルをずらし、自分の目でもそれを確認すると、途端に駆け出した。細かい砂に足を取られながらも、決して歩

みを止めず、次第に風のように走り出した。

砂が風に運ばれて、波打つような地形を描いている。津波のように急激に盛り上がり、いくつもの砂の山を築いている。

彼は、遠くに見える灰色の目標に向かって、一直線に砂漠を突き進む。進行方向にある山を駆け上がり、崖のように切り立った急な下り坂へと飛び降りた。砂を水飛沫のように舞い上げて滑り降りる。すると、その勢いで起こった風が、彼の身体を覆っている毛布を大きく翻した。毛布の下から彼の姿が現れた。

黒髪の少年。

金色の瞳で真っ直ぐに前だけを見つめる少年。その瞳には曇りがなく、なんとも力強い。

毛布が翻されたことで、彼のいでたちもまたあらわとなった。光を通さぬ漆黒の鎧甲冑。腰には一振りの剣を携えている。

少年は坂を滑り降りると、止まることなく駆け出した。彼の身体を覆っていた毛布が、風によって剥ぎ取られる。彼はそれを横目に確認するも、決して立ち止まらない。

「あそこに眠っているんだ、聖剣が……！」

少年は遠くに見えている灰色の物体を睨むように見つめ、そして、呟いた。

陽炎の幕に遮られた景色の中に、それはぼんやりとだが浮かんで見える。まだ微々たるものだが、距離が縮んだことで、それがなにかしらの建造物であることが見て取れた。

少年はただ一心不乱に走っている。

さきほど、風に剥ぎ取られ、取り残されてしまった毛布は、音もなく砂の上に落ちた。すると、その布がひとりでに盛り上がり、刹那、真っ二つに切断されてしまった。二枚になった布を押し退けるように、砂がまたひとりでに盛り上がり、その下から、巨大な影が現れる。それは、大きな黒真珠のような丸い二つの目で、遠ざかる少年を捉えた。

砂が、また一つ盛り上がる。そうかと思えば、砂の下からなにか

が飛び出した。それは長いもので、その先端には無数の返しがついた鋭い棘が。その棘の先端が遠ざかる少年に向けられる。照準を合わせるような動きを見せたその瞬間、棘が音と共に放たれた。

「!?」

少年はその音に気づいて、慌てて後ろを振り返った。同時に腰の剣を抜き、斬り上げる。刹那、鏡のように磨き上げられた刀身が火花を散らした。

それはまさに一瞬だった。

目の前に無数の返しがついた鋭い棘が迫り、少年は、反射的に斬り捨てようとするも、斬ることも叶わなければ、弾き返すことも出来ず、刀身を滑らせ、軌道をわずかにずらすことしか出来なかった。彼は後ろを振り返ったその勢いのままに回転し、辛うじて、棘の直撃をまぬがれた。

少年の背後の砂が爆発したように舞い上がった。見れば、棘が斜めに突き刺さっている。

「なんだ!？」

少年は棘が飛んできた方角に視線を向けた。自分がいま通ってきた道なき道。すると、景色の一部の砂がひとりでに盛り上がり、それが目まぐるしい速度で彼の元へと向かってくる。目の前に迫ったそのとき、砂の下からなにかが飛び出した。

巨大ななにかが

「くっ!」

少年は反射的に横に飛んだ。刹那、飛び出してきたそれが、激しい音を立てた。それは巨大なまでのハサミだった。砂と同色のハサミ。いまの音はそのハサミが閉じられる際の音だった。

少年が体勢を立て直す間もなく、砂の下からまたもなにかが飛び出す。

「なっ!？」

少年はもう一度横に飛んだ。次に現れたのもまたハサミだった。間髪入れず飛び出してきたハサミをさすがに避け切れず、少年の頬

がわずかだが裂けてしまった。しかし、まだ終わりではなかった。二つの巨大なハサミが出現したことで舞い上がった砂の向こうから、さらなる一撃が！

目の前に迫ったのは、あの鋭い棘だった。

少年は身構えることも出来ず、直撃を食らってしまった。

少年の身体が大きく後ろに弾き飛ばされた。彼がいた場所には、一本の棘が深々と突き刺さっている。

「ぐはっ！」

宙に舞い上がり、放物線を描いて砂に叩きつけられた少年。砂の上を転がり、ようやく止まったと思ったその瞬間、彼は素早く立ち上がり、踵を返し、そして、すぐさま駆け出した。

「砂に助けられた……！！」

少年の手には剣が握られていた。その刀身は歪み、一部が大きく欠けてしまっている。

まさに間一髪だった。

少年は咄嗟に剣を盾にしてその身を守ったのだ。おかげで、剣はひどい有り様になってしまった。

少年はまたも、灰色の建造物を目指して走る。いまと前ではその意味こそ違うが……。

逃げる少年を、砂の下から現れた巨大な生物もまた追いかける。六本の細くて長い脚を小刻みに動かし、少年の走りにも負けない素早さで移動する。頭の横についている二つの巨大なハサミをしきりに開閉し、胴体と繋がった長い尾をそそり上げ、先端についている棘を少年めがけて発射する。

少年はすぐに気づいて左右に動き回り、飛んでくる棘を巧みに避ける。突き刺さる度に舞い上がる砂に目を細めつつ、決して走ることはやめず、後ろを振り返った。

執拗なまでに追いかけてくる巨大生物、それは巨大なサソリだった。

少年はその目に、砂色の巨大なサソリを捉えた。

「やっと、突き当てたというのに……！」

少年は巨大なサソリを警戒しつつ、前を向き、遠くに見える灰色の建造物を睨みつけた。さらに近づいたことで、彼の目は、それが城であると判別が出来た。

砂に埋もれた灰色の城

少年と、彼を追う巨大なサソリは、その城を目指し、灼熱の砂漠を駆け抜ける。

(2)

それは、一ヶ月ほど前のことだった。

石造りの巨大な闘技場がある。そこでは日夜、大勢の者たちが鍛練に励んでいた。

騒がしくも、活気に満ち溢れた声が、そこでは毎日のように上がっている。

その闘技場の隣に小さな池のある小さい庭があるのだが、そこに一人、剣を振るう者がいる。巧みなまでの剣さばきを見せるのは、黒い髪の少年。

光る汗を飛ばしながら、彼は熱心に剣を振るっていた。

庭から闘技場の様子が垣間見える。ちょうど剣術の稽古に励んでいるところだ。大勢が稽古用の木剣を振るっている。その横で少年は本物の剣を振るっていた。木剣に比べればずっしりと重たいその剣を、少年は誰よりも早く振るい、立ち回っている。

「エクス！」

声が出た。

ちょうど真上から、垂直に剣を振り下ろすところだった少年は、自分の顔と水平になる位置でピタリと止めた。

「……なんだ？」

剣の柄を逆手に持ち直し、少年は横を向いた。

庭と闘技場の間の渡り廊下に、誰かが立っている。漆黒の鎧甲冑を身にまとったそれは、汚れのない雪のように真っ白な毛並みを持った、一匹の狼だった。

「ランスロット、おまえか。どうした？」

人間のように二足歩行が可能な身体を持った白い狼を見つめ、少年は、ランスロットと呼んだ。白い狼の彼の名前らしい。

「エクス、ガウエイン様がお呼びだ」

ランスロットと呼ばれた白い狼は、エクスト二度呼ばれた少年の元へと歩み寄る。

「ガウエイン様が？ なんだろう？」

エクスト呼ばれた少年は、少しだけ眉間を寄せた。

「私に聞かれてもな。なににせよ、おまえを呼んでいるのだ。急いだ方がいい」

ランスロットは小さくかぶりを振った。

「分かった、急ぐよ。すまない」

エクスは軽く頷き、池のそばに置いていた荷物を拾おうと歩を進めた。まずは鞘を取り、抜き身の状態である剣を収めた。次にタオルを取り、汗を拭う。剣術の鍛練に相当励んだらしく、身につけている肌着はもう汗でぐっしょりだ。

そんなエクスの姿を、ランスロットはどこか悲しげに見つめている。

「……エクス」

「ん？」

名を呼ばれ、後ろを振り返ると、ランスロットが闘技場を指差していた。

「どうして、闘技場を使わないんだ？」

「ああ……」

ランスロットがそう問いかけると、エクスはまたか、と言いたげな顔をする。

「エクス、おまえは騎士なのだぞ？ 私と同じ、獅子王親衛隊の、黒騎士の一人なのだ。おまえには闘技場を使用する権利がある。ガウエイン様を除き、誰もがおまえには逆らえない。それなのに、何故だ……？」

「ふっ」

ランスロットの問いかけに対し、エクスは鼻で笑った。馬鹿馬鹿しい、そう言わんばかりの顔でまた前を向き、さっと荷物を拾い上げた。そのまま、ランスロットから遠ざかるようにしてその場を離

れようとす。

「エクス、待て」

ランスロットはすぐに追いかけて、エクスの肩を掴もうとするも、その手を逆に掴まれてしまった。

「分かっているだろう……？」

悲しみ、淋しさなど、様々な感情を混ぜたような複雑な表情を浮かべ、エクスはそっと呟いた。

「……」

これ以上は聞かないでくれ、そう言われた気がして、ランスロットは、解放された手をダラリと下げた。

エクスは遠ざかる。ランスロットに背を向けたまま、一度も振り返らずに。

「エクス……」

エクスの姿が見えなくなると、ランスロットは横目に闘技場の様子を見つめ、ぎゅっと拳を握り締めた。彼の肩を掴もうとしたその手で。

「どうしてだ……？」

そこに誰もいないのに、ランスロットは問いかける。

「どうして、おまえは人間なんだ……？」

ランスロットは独り言のようにそう問いかけると、サファイアのように鮮やかな青色の瞳で、賑やかな闘技場で鍛練に励んでいる者たちの姿を見つめた。

ちようど獣の頭を持つ集団が列を成し、掛け声と共に走っている。

それが通り過ぎれば、鳥の頭を持った集団が、木剣を手に剣術を稽古に励んでいるのが見えた。

その隣では二足歩行の昆虫たちが体術の稽古をし、その奥では水を自在に操る魚たちの姿も見えた。

他にもヘビやカエルといった爬虫類の姿があり、恐竜のようなでたちをした者の姿もあった。けれど、どこを見ても、エクスのような人間の姿をした者はいない。

人間は、誰一人としていなかった。

荷物をベッドに投げやり、奥の部屋へ。

石の床、壁、天井の部屋に大きなかめが一つ。中にはたつぷりの水が入っている。

エクスは汗を吸った肌着を脱ぎ捨て、裸になると、桶で水をすくい、頭からかぶった。汗を流すついでに、ひんやりとした水で気を引き締めた。

「……くそっ」

エクスは乱暴に桶を捨てて、前の部屋へ。

石の床から、カーペットの敷かれた床へと移った。

エクスはかけられていたタオルを引つたくり、濡れた身体を拭いながらクローゼットの前に立った。

頭にタオルをかぶせて、目の前にある両開きの扉を開け放った。

クローゼットの中には、漆黒の鎧甲冑一式が飾られてあった。

鎧の左胸に、金色の獅子を象徴した紋章が刻まれている。

エクスは新しい肌着に着替え、漆黒の鎧甲冑を順に装着した。ベツドの上に置いていた剣を携えて、最後にマントを羽織った。漆黒のマントだ。鎧の左胸にもある金色の獅子の紋章が大きく描かれている。

エクスはマントを大きく翻し、颯爽と部屋を後にした。

足音を鳴らして廊下を突き進むエクス。ときおり誰かと擦れ違うが、相手は必ず廊下の端に立ち、左胸に拳を押しつけるといふ仕草をする。それは敬礼だ。エクスがその相手をチラリと見やると、誰もが畏縮したようになってしまう。その様子から、彼の位の高さが充分に見て取れる。

その擦れ違う相手だが、全員が人間ではない。

エクスは廊下を突き進み、ある扉の前で足を止めた。

大きな扉のその両脇には二人の人物が立っているが、どちらも人間ではなく、右は馬、左は隼の頭を持つ。両者共に、彼と同じ漆黒

の鎧甲冑を身にまとっている。

「遅いぞ、エクス」

隼の顔を持つ人物は、寡黙な口調でそう答えた。隼だけあってその眼光は鋭い。

「ガウエイン様を待たせるとは、相変わらず、いい度胸してるよな」馬の顔を持つ人物は、どことなく意地悪そうな物言いをし、歯を出して笑ってみせた。馬だけあって面長い顔をしている。つまり、馬面である。時々だが、笑い声にヒヒンツという声が混じる。

「汗臭いまま、お会いするわけにもいかないからな」

エクスは肩をすくめた。

「なんだ、訓練中だったのか？ ならば仕方ない」

隼は納得したように頷き、すっと目を閉じた。

「おいおい、訓練なんかするなよ。また、差が離れちまう。それ以上強くなるな」

馬は眉を顰め、不満げな顔を浮かべた。

「そうはいくか」

エクスは苦笑した。

「おまえも、少しはエクスを見習い、訓練に勤しめ」

隼は手にしていた槍の先端を馬の顔に向けた。指差すように。

「俺はおまえらのようにストイックにはなれんよ。　っていうか、槍で指すな、槍で。危ないだろうが、俺の顔は長いんだからよ」

馬は軽く顔を遠ざけ、彼もまた手にしている槍で、隼の槍を軽く弾いた。

「失敬」

隼はすぐに槍を元の位置に戻した。馬が持つ槍とちょうど交差する位置へ。

「それで、準備はいいのか？」

馬は、エクスに問いかけた。

「ああ」

エクスは頷くと、剣を鞘から引き抜き、扉の正面　交差する槍

の前に立った。

「油断するな」

「死ぬんじゃねえぞ？」

隼と馬は同時に槍を引き、大きな二枚扉を押し開けた。わずかに開かれた扉。それでも、エクスには充分通り抜けられる。

扉の奥が見える。数段の階段のその上に椅子があり、そこに誰かいる。

「武運を」

「負けるなよ、でも勝つな」

隼と馬の言葉を受け、エクスは目の前の扉を通り抜けた。すぐに扉は閉められた。

縦に長く、奥行きのある部屋。部屋の奥に見えるのは玉座だ。そこに一人の人物が座し、大きくて長い剣を、まるで杖のように自分の正面に突き立てている。突き立てた剣の柄の頭に両手を乗せて、目を閉じてじつとしている。

金色の立派なまでのたてがみを持つ、老獺な獅子だ。

「待ちくたびれたぞ、エクス」

獅子の目がカツと見開いた。金色の瞳が、同じ金色の瞳を持つエクスを見据える。

「俺を待たせるとはな、おまえも、生意気になったものだ」

獅子はゆっくりと腰を浮かせて立ち上がった。突き立てていた大剣を片手で持ち上げ、素早く一度だけ振り回す。とその次の瞬間、獅子はおもむろに駆け出した。

身構えていたエクスも、獅子に合わせたように駆け出す。

扉と玉座のちょうど中間、両者の剣が交差し、火花を散らした。

「真正面から立ち向かうか、生意気な！」

獅子は嬉しそうに声を上げた。

「俺はいつかあなたを超える！真正面でなければ、意味がないでしょう！」

エクスは吼えた。

「ますます生意気な！」

両者、相手の剣を押し返さんと両腕に力を込める。押せず引かすの力比べだ。そうかと思えば、両者共に相手の剣を弾き返し、軽く後ろに飛んだ。

「ぬう、ならば！」

獅子は大きく息を吸い込み、口から火を吹いた。獅子が持つ大剣の刀身が炎を宿す。

「俺だつて！」

エクスは、剣を横に向けた状態で前に突き出すと、左手に青い閃光を発する稲妻を宿し、刀身をなぞった。刀身が雷を帯びる。

「オオオオツ！」

両者共に剣を振るい、吼え、そして、駆け出した。同時に飛び上がると、相手めがけて剣を振り下ろす。

炎と雷がぶつかったその瞬間、凄まじいまでの閃光がほとばしった。

ドォーンッ！

爆発にも似た音がしたその途端、扉になにかが叩きつけられた。外にいる隼と馬は一瞬、びくりと肩を揺らし、後ろの扉を見やる。扉にはなんら変わった様子は見られない。

「エクス、さらに腕を上げたか……」

隼は鋭い眼光でもって扉を見つめていた。

「激しいなあ、おい」

馬は驚いたことで高鳴った胸に手をやりながら、どこか呆れるような顔をした。

「くそつ、負けた……」

悔しそうにそう呟いたのはエクスだった。彼は扉に張りついていて。背中を押しつけた状態で床に落ち、がくりと膝を落とした。

「辛うじて勝ったか。ふふっ、なかなか力をつけてきておる」

獅子は玉座に上がるための階段の前にいた。嬉しそうにそう呟くと、大剣を一振りし、背負っている大きな鞘に素早く収めた。

獅子はエクスに向かって歩き出した。それに気づいた彼も素早く立ち上がり、剣を鞘に収めて、獅子に向かって歩き出した。

獅子は途中で立ち止まった。それは先刻、両者の剣がぶつかったところだ。その辺りの床だけひどく焼け焦げ、ひどくひび割れてしまっている。

エクスも少し遅れて獅子の前に駆けつける。彼が遅れた理由は両者がいた距離にあった。両者の剣が交わった地点に辿りつくまでの距離が、エクスと獅子では有に倍もあつたのだ。無論、エクスの方が遠かった。

獅子はエクスの肩に手を置いた。

「今回はなかなかのものだったぞ。おまえの成長ぶりには目を見張るものがあるな」

獅子は嬉しそうな顔をした。

「ありがとうございます！」

エクスの方がずっと嬉しそうだった。

「訓練に身が入っているな。うむ、いいぞ。私を超える日も、そう遠くないかもしれん」

「そつ、そんな！俺なんかまだ、ガウエイン様の足下にも及びませんよ！」

エクスは驚いた顔をし、慌てて謙遜する。

エクスは、目の前の獅子をガウエインと呼んだ。

「当然だ！……ふつ、なんてな。そう謙遜するな。おまえはもはや、この私に匹敵するほどの力を持つておるぞ」

ガウエインと呼ばれた獅子はエクスの頭に手を乗せた。肉球のある大きな手で彼の頭を撫でてやる。

「……」

無言で、俯き加減のエクスだが、その表情はなんとも嬉しそうだった。頬をわずかだが朱色に染めているその顔つきが、なんだかず

つと幼く見える。

「自分を誇れ。おまえは、この私の右腕なのだからな」

「はい！」

エクスは顔を上げ、真っ直ぐにガウエインを見つめ、力強く返事をした。

「……しかし、また文句を言われそうだなあ」

エク스에合わせるように、ガウエインもまた真剣な表情を浮かべ、彼の目を真っ直ぐに見つめていたが、ふいに足下を見やり、表情をゆるめた。焼け焦げた上にひび割れた床を見やる。

「はい……」

エクスも途端に罰の悪そうな表情を浮かべ、足下を見やった。

二人は顔を上げ、お互いを見合つと、声を上げて笑い出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0740ba/>

くそつたれ聖剣伝

2012年1月3日02時47分発行